

ぶらりわが街宮沢界隈

(22) 福厳寺(ふくごんじ)と寺子屋―「光国和尚日記」

「福厳寺」(中神町1-3-3)―普濟寺(立川市柴崎町4-20-46)の末寺

[宗派] 臨濟宗建長寺派(りんざいしゅうけんちょうじは) [山号] 智勝山(ちしょうざん)

[本尊] 聖觀世音菩薩(しょうかんぜおんぼさつ) [開山] 夢窓疎石禪師(むそうそせきぜんじ)

[開基] 万松和尚(ばんしょうおしょう) 「開創」 寛永(かんえい)元年(1624)

[由緒] 「新編武蔵風土記稿」(*①「宮沢の地名由来」に記載)に「当院の境内は天正以前、立川宮内少輔(たちかわくなくいしょうゆう)(* 武蔵七党の一派で、立川市の普濟寺附近に居城を構えていた豪族。天正18年(1590)豊臣秀吉の軍勢により滅ばされた。)が一族の居宅せし跡なり」とあり、立川氏一族が居館した跡地を寺に改めたといわれる。それを裏付けるのかのように、境内には小高い土塁(どるい)の一部が昭和30年(1955)頃まで残っていました。

[堂・その他文化財] 第二次世界大戦までは、文化13年(1816)に在郷の豪商中野久次郎が寄進建立した本堂・鐘楼(しょうろう)があったが、昭和20年(1945)4月4日に米軍機の爆弾投下で、本堂、大玄関、書院、などが全壊焼失した。ただ、鐘楼は類焼をまぬがれて、戦災から残る唯一の建造物である。現本堂は、昭和36年(1961)5月、多摩地域で隋一の鉄筋仏殿のモダン建物として再建。空襲により多くの什物(じゅうもつ)も焼失してしまったが、開祖以来の「古過去帳」、「山岡鉄舟」などの書画、近世以来の文章・記録約150点が現存する。とりわけ、「光国和尚(こうこくおしょう)日記」は、幕末の住僧19世光国和尚(文政5年(1822)～明治25年(1892))が弘化4年(1807)住職になったときの一年間の日記で、近隣寺院との交流や「寺子屋」などが記録されたており、歴史資料として貴重なものです。

「寺子屋」―日本の近代教育は、明治5年(1872)学制の公布によって発足したが、徳川時代の一般庶民の教育機関は、普通「寺子屋」と呼ばれる私塾であった。現在の教育は学校があって、先生が採用されて生徒を教えるが、寺子屋はまず師匠がいて、その人を見込んで弟子たちが集まってくるのが大きな違いである。「寺」というのは別に寺院とは関係ない。昔寺院で学問を授けた名残で、手習(てならい)することを「寺」といい、習う者を寺子、「寺」を商売にしたり、「寺子」を集めて営業をしているから、その施設を「寺屋」または「寺子屋」と呼んだのである。江戸あたりでは、一町で数軒の「寺子屋」も珍しくなかったが、地方でも、村の知識人である名主や寺の住職などが、村の子供を教育していた。

○ 中神の教育の発祥の地―江戸時代後半から、代々の住職によって「寺子屋」が開設され、中神村の子供たちや大神村、速くは熊川村(現福生市)、八王子などから筆子(教え子)が集まり、和尚から読み方、習字、歴史、道徳などの教えを受けた。明治5年の学制の公布された後も、執中学舎分校、共明学校、中神学校として校舎として使われ、明治23年(1890)中神学校が独立校舎として開設されるまで、「福厳寺」におかれていました。

記 防犯宮沢支部会計 西山 禎一

